

日々好日

(令和六年十月発行)



弥勒菩薩座像 (納骨堂安置)

今年は元日の能登半島地震で明けましたが、八月には南海トラフ地震の予兆かと思わせる地震がありました。この地方は大きな地震は無いのだという何の根拠もない安心感の中で今まで生きてきたように思います。

中国新聞の岩柳版に岩国の地震について元岩国徴古館々長の宮田伊津美氏が岩国歴史探訪の中で、記録に残る寛永二年以降の地震について書いておられます。

その中でも宝永4年(一七〇七) 10月4日の南海トラフ全域にわたる巨大地震では東海から九州にわたって死者は2万人に及んだことが記されていますが、岩国の被災状況は述べられていません。

寛永2年の中央構造線断層帯を震源とする地震など激震とか大地震と表現される地震はたびたび発生し、錦帯橋の橋台の被害とか殿様の動静とか、河原に避難小屋を設けたことなどが記されていますが、人的被害の詳細は述べられていない。

藩はその都度万徳院など藩内の多くの寺社で地震除けの祈禱をさせたことなどが記されています。

こうした地震に加えて巨大台風もあります。10月1日は龍門寺被災の日です。建物更生保険で備えは万全とは言えません。後悔しないために為すことは多い。

弘法大師のお言葉

「吾れ若し、生日に勉めずして、蓋し一苦一辛に罹りなば、万たび嘆き痛むとも、更に誰の人をか凭(たの)まん」

(三教指帰卷下)



日々好日



二〇二四年十月



過ぎし夏の口々

自転車並みの速度で長く九州にあつて迷走し、遠く関東や東海地方でも多大な豪雨被害をもたらした台風十号が、最接近した八月三十日が当山恒例のお施餓鬼の当日でした。

例年、数日前から準備にかかりますが、今年は台風十号様のお参りで参詣者無しのお施餓鬼を覚悟して、例年とは違う段取りとさせて頂きました。施餓鬼壇を本堂の縁側に組み立て様々なお位牌を安置し、五色の五如来の幡を飾るのもとより、先代住職の頃から、天井一面に施餓鬼の偈文や、観音経などの経文、さらには先師尊霊・檀信徒一切精霊・戦没精霊・災害横死者から禽獣蟲魚の霊まで、数十本の五色の幡に墨書して吊るすという当山独自のお施餓鬼を勤めていましたが、今年はそれらを断念したということです。

そんなことで、これは夏バテ状態にある住職を気遣つての本尊様のお計らいであろうと都合よく解釈していたきらいもないことではありませんでした。

しかし、その台風自体が長逗留で疲れたかのように、前日から風も弱まり雨も心配するほどのことではなくなつて、「台風ですが、お施餓鬼は勤められるのでしょうか」と電話もかかるようになり、それなりの準備をさせて頂いた当日を迎えたことでした。

当日は荒れてはいないものの台風最接近の日で、電話をいただいた数人の参詣者にとどまるものと思つていましたが、それを十数人上回る方々が参詣されたのには驚き且、その信仰心を嬉しく思つたことでした。

酷暑に耐え台風の雨の中元気にお参りしていただいた方々にお施餓鬼ならではの法話をゆつくり聞いていただき、例年とは少し違って、長く記憶の残るお施餓鬼であつたことを喜びたい。

また、八月は原爆の日、終戦の日もあり、慰霊をなし平和を真剣に祈る日々でした。広島原爆の日の慰霊祭で小学生の読み上げた慰霊文の中で、「祈るだけでは戦争はなくなるらない」というような趣旨の文言があつたように思いますが、老骨には祈ることが行動である。言い訳がましいことですが、祈らないではおられない世界情勢なのは小学生に恥ずかしいことである。

この国の明日を担う与野党の党首総裁選が始まっていますが、与党自民党の総裁選は政治と金の問題が争点の一つというのには情けない。早く決着をつけて日本丸の安心安全な航行を論じ実現して欲しいものです。核の傘に頼らない恒久平和は望むべくもないのでしょうか。



野党も小異を捨てて結集しなければ政権交代などできることではありません。それができる党首が立憲民主党の党首選びだと思うのですが的外れでしょうか。

国を護るといふ一点で富国強兵に突き進むだけの舵取り役の登場は御免蒙りたい。周辺の独裁国家の指導者と渡り合える総裁候補は存在しているのでしょうか。多くを期待しないで見守りたい。

東日本大震災で被災した福島原発にかかわる処理水を海に放出をはじめて八月二十四日で一年になるという。現在も中国はそれに反発して水産物の輸入を禁じており、漁業水産業者は大きな影響を受けています。

その汚染水は現在も一日あたり80トンもあるという。処理水の放出が完了するのは何時のことになるのでしょうか。放射性物質を濾したフィルターの保管処分も万全を期してもらいたい。

その原発の廃炉にむけての第一歩である炉内に溜まっているデブリ（核燃料が原子炉内の構造物と熔けて固まったもの）取り出しが初日から頓挫した。

このデブリは放射線が極めて強く危険で当初の採取計画から3年遅れていたという。このデブリ取り出し作業は下請け任せで東電の社員の確認がなかったという。驚きと云うより呆れてしまう東電の無責任さである。

この作業、2週間かけての回収が3割以下だという。デブリは1〜3号原子炉内に880トあるといわれていますから、すべて取り出すのは先の回収量だと80万年後のことだということになります。

このデブリ回収作業に将来最新技術が用いられることになれば一抛に解決して案じることはないのですが、何しろ危険な放射能のことですから、回収作業の完了はいつのことになるのか誰にもわからないことなのでしょう。

東電は二〇五一年までの廃炉を目標にしているようですが、それには一日80割を取り出す必要があります。作業が初日につまずくようなことでは五一年の廃炉など信じられることはありません。

青森県六ヶ所村の使用済みの核燃料再処理工場の完成が2年半程度遅れているということも判明しました。

このような為体では、原子力発電の必要性は認めても、将来にわたって不安感は拭えません。使用済み核燃料の中間貯蔵施設の建設受け入れを探る上関町の動向も無視できることではありません。

NHKの朝ドラ「虎に翼」で原爆が国際法違反であるということ、被爆者が賠償を求めた裁判が放映されていました。その後も戦争は絶えず続き、ウクライナ戦争では核使用を仄めかす鬼畜のような大統領の存在も明らかになりました。世界平和は夢また夢なのでしょうか。



そして、今一つ忘れられないのは岩国基地にあのオスプレイが配備されることを市長が容認し、和木町・周防大島町の両町長が追認したことです。

オスプレイは、飛行高度も低く操縦士の顔が見えることもあり、特異な形状も不安を掻き立てるのですが、事故が発生しないことを祈るばかりである。

お盆・八月二十四日の地藏盆を前に大小幾枚もの地尊の前掛けを、今年も広島在住の西岡明美さんが御奉納いただきました。これは夏の日の嬉しい一齣です。

万徳院の仏画と小さき佛たち

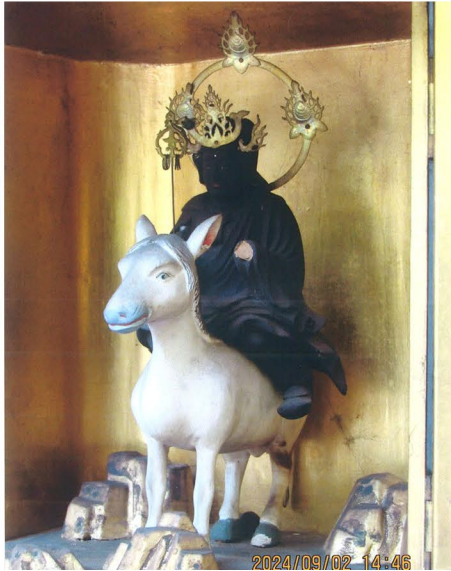
当山にも厨子入りの小さな仏像は幾躰もありますが、寄せ集めの感が強い。

それに対して万徳院のそれは、万徳院由来記に記されている由緒正しい点で貴重である。

大聖歡喜天は先々月号で挙げていますので今回はそれを除く三躰を挙げてみました。

※勝軍地藏（愛宕大権現）

由来記に次のようにあります
「此の尊像は芸州毛綱村当院の境内に勧請。其の後、雲州に移り富田に至り尊崇怠ざると雖も、再興すること時未だ到らずして年歴を経て享保四年源善法印、今、境内中山の地に神殿を建立す。社殿三尺四方、拜殿二間四方」



現在はこの社殿等はなく本堂に安置。

勝軍地藏は、敵軍降伏の三昧に住する地藏菩薩なるも、儀軌に本拠なく、役小角、愛宕山に登る途にて感見したともされ、愛宕山は古くから、火の神を祀り。その神は火を守り、火を防ぐ両面があった。そこに寺院が建ち修験道の霊地となり、明治まで白雲寺という寺院があったが、明治に廃寺にされ今は、愛宕神社となっている。

地藏菩薩なるも甲鎧を身に着け白馬に騎乗する。この姿は後世、武家が好み火伏の神として境内の鎮守神として勧請したものと考えられる。

厨子の内扉に僧が描かれている。役小角・中興の祖慶俊なるか、定かではない。

■愛染明王

朱塗の蒔絵の厨子はそれだけで、三代藩主廣嘉公の念持仏であることが信じられる見事な厨子である。尊像は小像ながらも細密な造りで玄真院の守り本尊であることを疑うことなき優作である。



■妙見菩薩像 二躰

像容は大小なるも同じである。即ち右手に刀を持ち頭上に掲げ左手は二指をのばしている。

この二躰は寛保の由来記に記載がないので、後代の勧請と思われます。北極星を神格化したもの。

(いずれも厨子入り)



他に、涅槃図・八祖大師（八幅）・十二天（十二幅）があります。

八祖大師は益田元祥御室（広家公の姉）のご寄進。十二天は広家公の御寄進。いずれも修復済である。



ここで、由来記に記されているものから、今日、散逸しているものを参考までに挙げてみました。

- 一 阿弥陀三尊（行基菩薩御作）中尊 御丈二尺余。
- 二 十一面観音（六世宥善代造立。御丈一尺五寸。
- 三 普賢延命菩薩（享保七年御寄進、御丈五寸。
- 四 不動尊座像（御丈八寸。
- 五 不動尊 二幅（元長公御寄進。内一軸に火焰の中に空海の文字あり。

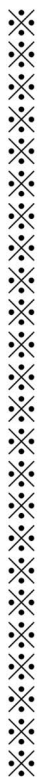
- 六 如意輪観音（弘法大師筆
- 七 両部大曼荼羅 二軸（広家公御寄進。
- 八 両部種字曼荼羅 一軸（元長公御寄進。禅応代。
（大唐、青龍寺の御本模写。真然僧正以来代々相承。

- 九 五大尊 大幅一軸
- 十 不動尊 大幅（智證大師筆。
- 十一 弥陀三尊 二幅 慈光院（元春公室御寄進。
真如親王正筆、中将姫正筆
- 十二 胎藏大日 一幅（元春公御寄進。
- 十三 弘法大師御影 三幅
恵果阿闍梨筆・真如親王筆・善通寺瞬目の御影の写し。
- 十四 不動尊 宅間法眼正筆

この仏像仏画仏具の数々の他にも茶道具から元就公御持物という舍利塔等々、散失品は数知れず維新以後のこの寺の窮状を如実にあらわしていると解することができます。

それでも、先代俊澄晋山以来仏像仏具の修復がなり継承した弘昭の代にも金箔の多宝塔などの寄進もあり、真言宗寺院としての荘厳が調えられつつあるのは喜ばしいことである。

これまで、数カ月にわたって万徳院のあれこれを綴ってまいりましたが、今月でこの稿の筆を一先ず措くことにします。



高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写経 六四六

- | | | |
|------|------------|--------|
| 二卷奉納 | 岩国市装束四丁目 | 福島 松代殿 |
| 二卷奉納 | 岩国市南岩国町二丁目 | 沖本あつ子殿 |
| 一卷奉納 | 岩国市通津 | 吉岡 律子殿 |
- （八月十一日〜九月十日奉納分）

☒二人の天子の求願

仏は舎衛国の祇園精舎に在りました。在る時、二人の天人が天上より下り、仏のもとに来詣しました。その天人の身は金色の如く輝いていました。仏の妙法を聞いて開悟し、天上に帰って行きました。

その翌朝、仏弟子阿難は仏に問うのでした。

「昨夜の二天人は浄光赫奕たり、昔どのような功德を積んであのような妙なる結果を得ることが出来たのでしょうか」と。

仏は阿難に告げられました。

「迦葉佛の世に二人は戒を受け、一人は国王となることを願ひ、一人は天に生まれることを求めたのである。

その後、一人は非時に食事をし破戒のゆえに天に生まれることを得ず、一人は求願が叶い王家に生まれたのである。その王宮に一人の男あり。王のために園を守り日々様々な果物などを献上していました。

在る時、園にはないマンゴーが池中に漂うを見て献上したいと思いましたが、常に門の役人が難癖をつけるので先ずその門監に分け与えたのでした。

門監もまた上役に妨げられること多く、上役にそれを与えて機嫌をとるのでした。その役人は自分は食はず夫人に与えたのです。

夫人もまた自ら食はず、王に献じて王の気を引こうとするのでした。王はそれを食して余りの美味しさにその来由を問うのでした。そして、その美味なる果がてんでんとして王に捧げられたことを知るのでした。

そのおおもとは常に園を守り新鮮な果物を届けてくれる男だと知るのでした。

王はその男に命じました。

「今より以後、このマンゴーを毎日断絶することなく献上せよ」と。

男はマンゴーをえた経緯を説明するも王は怒って告げました。

「若しそれを為さざれば、汝の身を斬るべし」と。

男は憂愁懊悩して聲をあげて泣くのでした。その鳴き声を聞いて一の龍が園監に言いました。

「貴男はどうしてそのような大声で泣いているのですか」と。園監の男はいきさつを話しました。それを聞いて龍は水中に入り、多くの美味なる果物を盤上に並べて言いました。

「この果物を王に献上しなさい。そして言ってください。『この果物をもたらしたのは龍で、王とはもと親友なり。戒をふたたび受けて龍身を脱して人身に戻りたし。授戒できるように尽力してほしい。してくれなければこの国を覆し大海に没せしめん』と。」

王は親友の願いを叶えたいと思うも既に仏はなく、手近に經典などありません。途方にくれて大臣に相談すると、「我が家の柱に光明輝くものあり、試みにその柱を調べてみてください」と。

すると不思議や柱の中から二つの巻物が出てきたのです。一は十二因縁経、一は八斎戒文だったのでした。

王は喜び金盤に乗せて龍に与えたのでした。龍はこれを得て八斎戒を授戒し命終して天宮に生まれ、王もまた戒を修治して命尽きて天上に生まれたのである。

その二人が昨夜ここに来て、我が法を聴き三悪道を息め、天堂に遊び修行して涅槃に入りぬ」と。

佛、これを説き給うとき、一切の衆会、歡喜して奉行せり。

あとがき

昨年以上の猛暑の日々をやり過ごし、八月末の台風一過、昼間はともかく朝夕は虫の音も聞かれて凌ぎやすくなりました。

それでも未だ続く厳しい残暑に「残暑疲れ」という言葉が今年はじめに聞きました、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

中秋の名月は、九月十七日ですが今年はじめに地元通津の「桜井戸」での観月の夕べの催し（十八日十七時）の御案内を頂いたので参加してみたいと思っております。

通津は岩国の中心部から遠く離れた鄙びたところが、集落ごとに地藏尊が祀られ五百羅漢をはじめ随所に大小無数の神仏の祠があり、歴史を感じさせる旧跡も多く単調な僻地ではありません。

桜井戸は信仰の対象物ではありませんが、昭和六十年七月二十二日に名水百選に認定されています。広家公が通津に隠居される頃には既によく知られていた。干ばつにも涸渇することなく、地区民の飲料水や灌漑用水として重要な井戸である。近郷のお茶会ではこの井戸の名水を用いている。

秋のお彼岸には天地自然の恵みを感謝しながら、ご先祖の御供養を懇ろに為して頂きたいものです。

発行者

高野山真言宗

寶池山 龍門寺

吉岡

光昭



納骨堂

慈悲の彌勒に

懐かれて

永遠の安らぎ

毎日を癒して



岩国市通津 3634 番地 3

☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

☎岩国 (0827) 38-4611 番